施政三十年回顧と展望六[[1]](#footnote-1)

朝鮮の文藝の今日と明日

　香山光郎

諺文のは今にはっきりしない。半に文が入つて來なかつた前から今の諺文の母たる朝文があつたといふ記もあり、証據もあるさうであるが、まだ定説はない。しかし諺文が今日使つてゐるものゝに成され、一般に通用するやう國家で定めたのは、朝第四世であり、同時に王の誉高かつた世大の時である。彼の名な申叔舟、成三問は諺文整理の者である。今雅楽とか正とかばれている、朝古もこの世大が堧にじて集大成させたものであつた。   
　諺文が完成されるや、世宗大王は、この諺文を使用し龍飛御天歌なる雄大なる長篇叙事詩を作られた。これは李朝の太祖大王の建国の事實を叙したものである。世宗の第二王子で文宗、端宗の二代を經て、王となられた世祖がまた父王に劣らぬ英王で、種々の治績を殘したのであるが、諺文を以て月印千江之曲といふ、釋尊本行成道を叙した大詩篇を作られたことや、法華經、円覚經、金剛經等の佛典や、四書五經、杜詩等飜訳をせられたことは諺文文學の基礎を奠めたものと云へよう。   
　しかし、世祖以後、支那崇拝の思想が両班階級を風靡して、諺文を卑しみ、ために爾來五百年間、数百篇の短歌以外には諺文らしい文學を生ぜずに終つた。   
　かくして日に及んだのであつた。日ので朝の青年達は或は生として或は私生として日本に學するものが数に上り、これらのものが朝鮮に帰つて新しい、動をしたのであるが、かの南氏もこの學生の一人で、が、朝最の學というべき『年』をしたのは、熙二年、ち明治四十一年で、当時氏はわずか十九の年であつた。   
　『年』のには、『日本に御學のが太子下と太文』という真がつている、太子下とは今の下であらせられることはいふまでもない、そして、劈に『海より年に寄す』という新がっている、これがらく朝におけるのであらう、氏は『年』に盛にを書いた、全のど半分は自作のでめられていた。   
　作者自は、學としてよりは、或る神気魄の吹を目として書いたのであろうが、これが朝新の始まりであった。筆者もこの『年』にや小説やうのものを書いたものであるが長小説『無』を毎日新紙上にしたのは大正四年かと記する。これが朝鮮における小説學の始まりといはれている。それから間もなく大正八年の萬事があり、の政治のなどあつて、今までじられてゐた、諺文の新の発行が許された、そこで、堰き止められてゐた、が流れ出すやうに、詩や小説がどんどん生まれて、來二十年、今日あるやうな朝學が出來あがつたのである。   
　音楽や美術にしてもさうだ、文學は併合以前から芽生えがあつたとも思へるが、現代的な音楽、美術、演劇、舞踊などは全然併合以後の産であり、もっと精確にいへば齋藤政治以後に始まつたものである。それらのものゝ水準がどのくらいであるかといふことがよく問題になることであるが手取早くいへば、鮮展の美術のやうなものと見て差支ないと思ふ、唯文學に一日の長があるかも知れない。   
　し朝のは一大に遭遇した。それは朝人の、ち内一のことである。朝合以来朝人が日本國であつたことはいふまでもないが、窃かに、としてを支持して來たのであつた。これを主とぶのであるが、この主は、政治のものでなくてのものであつたし、為政當でもその意味で認めて來たものであつた。つまり、風、從つて學や、や、や、建様、などにおいて朝人はを許されるものと信じて來たのである。大正八年後の認といふのは海における一の人達をいては、今いつたやうななものであった。ちにを持しつゝ日本國の成要とならうといふのである。今日においてもこのへはまだすつかり清されてゐないこととふ。

ところが支那事變以來、南総督政治の内鮮一體の觀念においては、これは許されないことになつてゐる。朝鮮人は民族という觀念を綺麗に清算して、すべての朝鮮的なものより一應離脱して、白紙に還つて、そして皇國臣民として、出直せといふ建前のやうに解せられる。いひかへれば、朝鮮人は單に日本國民となるに止まらずに、大和民族になる。そして完全に平等な單一な國民に融け合へ、といふ風に取るべきかと思ふ、そして、この呼掛けに對して、朝鮮人は七割九分三厘の創氏改名によつて應へたのである、ち、よし、われわれは大和民族に溶け込みませう、といつたわけである、今一度いひかへれば、朝鮮民族は大和民族に融け込むことによつて、新しい生命を獲得しよう、永遠の繁栄を計らうと腹を定めたわけで、いはゞ民族の發展的解消を斷行したのである、こゝにおいて朝鮮民族は血液的に精神的に併合されたといへる。

かうなれば、朝鮮人のあらゆる文化的態度に大轉換を來たさねばならない、大轉換といふよりはむしろ全然出直さなければならない、殊に觀念藝術たる文學においてそうである。 　客秋における朝人會の成、家會の成は、この理でなされたものであるが、そのが作品として現はれるまでには、なおそこばくの時間を要するであろう。なんとすれば學やは人生社会の分泌物であり、花であるから、或るや信だけで時に産まれるものではない。のように□醸の間を要する。いづれにしても今後の朝學やは、唯だ郷土色を帶びる以に朝なから離れることだろう。朝にんでいる日本人の作つた學やといふことになつて、日本學、日本の地方一分野をづくるに止まることだろう。このことは、力ある朝人や家は朝人より生まれるであらうところの政治家や人がさうであらうく東京において出世するだらうことを意味する。も九人や東北人がさうであるやうに。

筆者紹介　香山光郎氏は朝鮮文壇の巨匠、明治廿五年生れ、早大文學部哲學科出身、半島言論界華やかなりしころ東亞、朝日[鮮]等の編輯局長として十五年間半島文化向上に盡した功績は蓋し大きいものがある、また作家として往年の傑作『無情』『愛』外数十篇の名作があり、最近には歴史小説『世宗大王』の大作がある、第一回朝鮮文人協會長でもあった【寫眞＝香山氏】   
  
[写真（香山氏）]

1. 1940.9.30.京城日報朝刊1面 [↑](#footnote-ref-1)